令和四年度
立正大学哲学会卒論報告

無常への試み
－現代不安によせて－

内山　栞

序、論文概要

この卒論は筆者が、現代に切実な不安すなわち、科学技術発展の末の「世界の破滅」への恐れを持っていることに始まる。科学技術は人類を「豊か」にし、日常生活を快適にした一方、幾たびも深刻な問題を引き起こした。戦争のための大量殺戮兵器も、原発事故とその周辺住民の放射線被害も、ウクライナ侵攻も、他国のミサイルに脅かされているのも、元を辿れば全て科学技術の発展から成る。

そもそもその背景には、物のみならず、人でさえも価値の有無を問われ、商品として扱われるという、「他」を対象化する世のあり方があると筆者は考える。個人、社会、あるいは国家の一方的な利益を優先し、その対極にある個人、他生物、環境を都合よく解釈し、利用する。これが「他」を対象化する、ということである。「他」を対象化する社会のあり方、その応用である科学技術とその発展は、現代において解決されない。科学技術は今後も発展し続ける。その先に取り返しのつかない「破滅」の事態が起こらない保証はないし、「他」を対象化することが現代の社会構造である以上、我々はそれに従属し続けなければならない。こうしたことのために「現代不安」は根深い。

人は不安を抱いた時に、その不安に打ち克とうと行動しない限り、そこから目を逸らし、娯楽などの享楽に走ることが多い。それで一時は多幸感を味わうことができるし、不安と向き合わずに済む。しかしやはり何事も一時凌ぎに過ぎず、無意味であることを悟る。不安は再度、人を襲う。その現実、己の惨めさ、無念さから無常を感じ、場合によってはその厳しい現実に立たされた自分に陶酔する無常美感が生まれる。卒論ではこれを「はかなき」無常と定義した。筆者が思うに不安は娯楽、享楽、そして「はかなき」無常に逃げたところで解消されず、科学技術発展の末の「破滅」への不安はなおさら解消されない。そうであるならば、現実それ自体（無常）を極めるべきではないかと筆者は考えた。これを踏まえて、唐木順三の著作『無常』で論じられる『正法眼蔵』の道元の思想を読み解き、現代を生きる手立てを求めた。

1、「はかなき」世界と無常

無常の本来の意味が見失われていることから、まずは書き手と読み手の無常の認識を揃えた。真の「無常」とは、唐木いわく「万物が生滅流転し、常住ではない（現実）」すなわち「自他を含めての事実」である。だが一般的な理解は、「常住ではない」ことへのはかなさ、哀愁も含まれている。そのため、古典文芸を基に、唐木の解釈と織り交ぜながら、「はかなし」という言葉の成り立ち、「はかなし」から無常への変遷について論じた。

「はかなし」の「はか」とは、一定の区画、あて、際限、テンポといった空間、基準のことである。そこから「はかなし」とはそうしたことの否定態であると唐木は捉えた。

「はかなし」と無常の変遷を論じるにあたって鍵となったのは「世の中」という言葉の移ろいである。『かげろふの日記』と『紫式部日記』は、王朝期の女流文芸であり、この当時「世の中」は、世間、人間関係だけでなく「男女の仲」という意味でもあった。作者各々が政治、社会、男の「はか」と女の「はか」、そこにテンポのずれ、はかなさを感じ、心の不安定性を描いた。そうした意味で「はかなし」である。だが中世になるにつれて、現実の厳しい社会という意味での「世の中」が主流となる。『紫式部』から約100年後の『今昔物語』では、王朝女流作品とは異なり、出来事が淡々と綴られ、心理描写が見られない。更に約100年後の作品は、戦乱の「世の中」を作者各々がそのままに記し、現実、生存の不安定性を表している。特に『建礼門院右京大夫集』の作者は、愛する人を喪い、かつて栄えた己の拠り所の荒廃さ、そのはかなさ、常のなさを体験し、記した。情緒はその際介入しない。これが「はかなし」（無常感）ではない、現実それ自体としての無常である。ゆえに「無常を感じる」といった、無常と哀愁をイコールに考えることは、その当人が無常を外側から捉え、ある種他人事として語っている「はかなし」である。この「はかなし」ではない、「自他を含めての事実それ自体」としての無常を、道元は極めたのである。

2、道元禅における無常

道元の教えの要に、ただひたすらに坐禅を組むというものがある。だが、その前提として「心を無常にかけて」、一切捨棄の精神で、時間の有意味化、装飾化を否定し本来の時間（無常）に対面することが必要である。真の道心者になるには「無常を観ずる」ことが必要だと道元は考えていた。無常という現実が己にはどうにもならないため、ただ我れの心を離れて、無常という世を静観する。これを踏まえて、無常という現実（客体の事実）に己（主観の側）の身心を委ねる。すなわち「心を無常にかける」のである。

現実は、無目的、非連続、無意味なことの反復だと、時間の有意味化、装飾化を否定し、実相である刹那生滅、刹那生起という本来の時間に相対するべきとした。時間の本来性、すなわち虚無において、物事の「始め」も「終わり」もない。凡て「時は起なり」であり、生まれる、死ぬ、咲く、散る、において、「起時法起、滅時法滅」である。時間という虚無が土台であるがゆえ、凡て実体がない。例えば、一輪の花それ自体は仮の姿、衆法合成（四大五蘊）の仮の場である。そして、一輪の花が開くにも、全世界、全宇宙の協力がいる。一人でに咲くのではなく、春即梅華（花）、梅開春到である。「梅は早春に開く」と同時に、「梅は早春を開く」。この梅開春到に基けば、華開において世界起である。花が開くことで、世界が初めて花の開いた（別の）世界となる。梅と早春、花と世界といった両者の相互作用は予期せずして起こる。衆法合成が思いがけなくなされること、時が円熟して良い契機が起こるという時節到来である。ではなぜ、衆法合成の仮の場である一輪の花が同一性を保ち、ここに「ある」と、存在を示せるのか。衆法合成の仮の場の観点から言えば、刹那生起、刹那生滅で、一輪の花は前後裁断、瞬間において切断されている。こうした無常の基本構造がある一方、一輪の花が常に空間の「今」という瞬間に存在しているのも事実である。空間の「今」とは、今こうして「ある」存在としての「有」のことを指す。一刹那一刹那切断される時間の無、すなわち無常と、存在として確かに「今」ある「有」としての常が交錯する。その無常と常とが交錯している時間を「このいま」（而今）と定義した。「こ

のいま」に一輪の花の存在が示される。道元は、これを実践面、すなわち修行に落とし込んだ。ひたすらに座禅をすることで身心脱落をするという只管打坐である。

「かの行持を見成する行持は、すなはちこれ、われらがいまの行持なり。（…）行持のいまは、自己に去来出入りするにあらず。いまといふ道は、行持よりさきにあらず、行持現成するを、いまといふ。」
（…）花において春が、色において空があるように、われにおいて行持が、縁起において行持がある。いな、おいて、ではなく、花・春、色・空、我・行持、縁起・行持である。逆にいえば、春は花なくしてはなく、行持はわれなくしてはない。※1

行持とは、我が今、この瞬間において為す修行のことであり、その際、行持は我と不可分に現成（出現）する。同様にこの瞬間において、衆法合成の仮の場である我は行持を為して、行持と不可分に現成する。我即行持、行持即我、つまりは我・行持、行持・我である。行持は現成即行為、行為即現成と転じる「今」という様相を含む※2。すなわち、我・行持は衆法合成における一刹那毎の「今」における我と、「今」において様相を成す行持とが不可分的関係であることを意味する。

こうした我と修行、畢竟じて今この瞬間の行持を極め尽くし、道元は身心脱落した。一切が無常でありつつ、存在の疑いようがない世界のありよう、「このいま」に、自ら行持によって面したのであった。

結論

結論は次の通りである。まず、この不安な現代（無常）を静観し、世の根源法則も現実も無常であると理解する。そして、捨てることをも捨てた「一切捨棄」を身心ともに一貫し、無常という現実に身を委ねる。こうした「心を無常にかける」ことにおいて、「このいま」に没頭し、無常を無常として自覚しないままに没頭する。「このいま」に没頭するとは、一刹那一刹那毎の我と行為の関係が、我・行為であることに没頭することである。例えば今、食事をしているとしたら、道元禅に則れば「このいま」食事をしている、すなわち、我が食物を咀嚼していることについて、我即一咀嚼であるし、我・一咀嚼である。その一刹那一刹那毎の咀嚼によって我は存在を成す。そして、我・行為のもと日常を過ごせば、現代不安の入る余地がなくなる。また全てにその向き合い方が一貫していれば、現代不安は元々ないものとなり、そうした意味で「解消」される。

心を無常にかけて、我・行為という「このいま」を尽くす世界においては、「他」を対象化する傾向も克服される。我・行為、あるいは我・物の「このいま」の関係性は、両者が不可分的で優劣がなく等しいというものである。「他」を対象化するということは、主観的見方、自己執着から生じるが、「このいま」に生きることで、「他」を対象化することから、「他」に配慮することに変わるのである。

---

1 唐木順三『唐木順三ライブラリーIII 中世の文学　無常』所収の『中世の文学』166頁～167頁

2 同書168頁

参考文献

唐木順三『唐木順三ライブラリーⅢ 中世の文学　無常』中央公論選書（2013年）
同上　　『唐木順三全集　第四巻』筑摩書房（1967年）
同上　　『唐木順三全集　第九巻』筑摩書房（1968年）
同上　　『科学者の社会的責任についての覚え書』ちくま学芸文庫（2012年）
岩波書店『岩波哲学・思想辞典』（1998年）

論文の本筋、また結論の核になった道元の思想（道元禅）は、主に参考文献の一段目『中世の文学　無常』の中の『無常』と、『中世の文学』の「中世芸術の根抵－道元－」に基づいている。